



①仙寿院で芝崎住職の講話に耳を傾ける学生ら ②宿泊先から走って高台まで避難する学生ら
③祈りのパークで東日本大震災の犠牲者に祈りを捧げる学生ら
④岩手大学釜石キャンパスの学生が主催した「おさかなフェス」でタッチプールを体験する学生ら



ミネルバ大とは？

2014年9月に開校したアメリカの4年制総合大学で、学生の85%以上が、世界の約100カ国からの留学生です。設立にはハーバード大をはじめとするアイビーリーグの学長、学部長らが参画し、2022年から4年連続で「世界で最も革新的な大学」に選出されています。

同大学では、双方向型のオンライン授業を通じて学びを深めながら、世界各都市でフィールドワークや社会課題に取り組むプロジェクトを展開しています。本年9月からは、日本・東京が世界で8都市目の拠点として加わり、フィールドワーク先として釜石市、兵庫県姫路市、和歌山県田辺市が選定されました。

釜石市 × ミネルバ大学

共に学び 未来を創る地域に

9日は、釜石の復興に向けた考え方や過程を学ぶ講話とまち歩きを通して復興後のまちづくりを学ぶプログラムに参加。また、夜には三陸沖で発生した地震の影響により津波注意報が発令され、学生らは奇しくも学んだプログラムを実践する事態にもなりました。

フィールドワーク全体を通じて学生からは次々と質問が飛び交い、災害から復興までのまちづくりや防災を積極的に学ぶ姿勢が見られました。また、出される質問内容も、湾口防波堤の具体的な設置手法や被災時の補償内容など、当事者として捉えた質問が目立ちました。

今回の交流では、地元の学生たちとの交流も行われ、8日には、震災の伝承や防災活動に取り組む釜石高校の有志グループ「夢団」に所属する釜石高校2年の高橋美羽さんがミネルバ大の学生らと防災に関する意見交換を行いました。9日には「おさかなフェス」を企画した岩手大学釜石キャンパスの学生らと学生同士で活発な意見交換も行われるなど、国を越えて同世代の交流が図られました。

当市では、ミネルバ大との共創を続けるとともに、国内外の企業や大学に学びの場として選ばれ、新たなつながりを育めるよう取り組んでいます。

11月8日、10日の3日間、ミネルバ大の2年生48人が当市を訪れ「災害復興と防災」をテーマにフィールドワークを行いました。

市は、まち全体を学びの場とする「釜石オープン・フィールド・カレッジ」を推進しており、さまざまな学びの場を創出することで、市の未来を担う人材の育成や交流人口の拡大を目指しています。このフィールドワークもその一環として当市が同大学と本年10月に締結した包括連携協定に基づき行われたものです。

8日、学生らは、宿泊先のホテルから近くの津波避難場所である仙寿院への避難を体験。その後仙寿院の住職である芝崎恵應さんが東日本大震災発災当時のビデオとともに講話を行いました。芝崎住職からは「歩いて坂を上る学生がいたが、のんびり歩いていたら助からない。もし津波が来ていたら、皆さんの3分の1は亡くなっていた」と迅速に逃げることの重要性が語られました。

その後、学生らはNIT東日本が企画した防災プログラムでデジタル活用の事例と課題などを考えるワークショップに参加した後、いのちをつなぐ未来館や祈りのパークを見学。震災時に小中学生がとった避難行動をたどる追体験プログラムにも参加しました。

釜石の学生から



岩手大学4年
浅野 蒼矢 さん

海洋環境の変化に伴い、釜石で取れる魚が変化していることを伝えました。説明を聞くだけでなく、タッチプールで見て・触って・知ってもらえたのが良かったです。今回の体験がミネルバ大の学生さんにとっても印象に残っていただければ嬉しいです。

元々防災に興味があるわけではなかったですが、夢団の活動を知り、自分もやらなきゃという思いで、活動を始めました。日本で自然災害が多く起きている中で、海外の人たちにも高校生が立ち上がって活動していることを知ってもらえて良かったです。



釜石高校2年
高橋 美羽 さん

ミネルバ大学の学生から



ミネルバ大2年 ジョージア出身
リザ・サダテラシュヴィリ さん

釜石で得たことは「未来への希望」です。ジョージアでも2年ほど前に土砂崩れが起き、友人を亡くしました。自然災害が愛する人を奪う可能性があることを身をもって知りました。釜石の人は、大規模な自然災害に遭っても、それを理由に諦めたりしない。この地を深く愛し、住み続け、大きな希望を抱き、コミュニティー全体がより良い未来に向かって取り組んでいます。特に高校生など若い人たちが大きなイニシアチブを取っていることに感動しました。この事実は私に未来への希望、そしてジョージアをより良くする可能性への希望を与えてくれるものです。